

「声の近代化」からみえてきたもの —3年半の共同研究を振り返る

文
劉 麟玉

共同研究 ● 音盤を通してみる声の近代—台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に (2011-2014)

共同研究の出発点

本共同研究は今年度が最終年度となる。そこで本稿では、研究の目的に立ち返り、それを明確にしなが、これまでに得られた研究成果をまとめてみたいと思う。本研究の目的は、日本のレコード会社によって1945年以前に台湾と上海で発売されたレコードを取り上げ、両地域におけるレコード産業と音楽の発展の特徴、およびそれらの関連性を明らかにすることであった。研究課題名に「音楽」を使用しないで「声」を用いたのは、「声」・「歌」を含む音楽ジャンルのレコードに焦点を当てていくと、アジアの在来音楽には語り物が多いこと、初期のレコードには、演説、映画説明、戯劇といった「音楽」に限定されない多様な音が収録されていたことによる。

また、台湾、上海、日本という3つの地域を取り上げたのは次のような理由による。台湾のレコード研究は21世紀に入ってもなお初期段階にあり、一次資料が不足していた。同様な状況は上海にもみられた。また、1945年以前の台湾の音楽文化と上海の音楽文化には共通点があり、録音された音楽のレパートリーには重なり合う部分が多くみられた。一方、初期から日本の企業がレコード産業を支配した植民地台湾と、欧米のレーベルが産業の基礎を築き、後に日本企業が進出した上海では、レコード制作のあり方が大きく異なっていたが、そこには「日本」という共通のキーワードがあった。したがって、台湾と上海のレコードの比較は、メディアの発展、日本の支配、地域間の相互交流といったものが、東アジア音楽の近代史に、どのような影響をもったのかを明らかにするための糸口になるであろうと考えられた。これが本研究で台

湾、上海、日本という3地域を取り上げた理由である。

共同研究員による報告のまとめ

共同研究の発足以来、共同研究員によって、さまざまな観点から研究が進められてきた。そして、1つひとつ本研究課題をクリアしていく過程で、新たな課題もみいだされてきた。また、各研究員はかならずしもレコード研究を専門としていなかったが、それぞれの立場から、レコード研究と自分自身の専門性をリンクさせるべく取り組んできた。研究会で発表された内容をまとめると、5つのテーマで括ることができる。それぞれの研究内容は以下の通りである。

1. レコードにみられる伝統音楽の変容：現在はスタイルや演奏法が定着し、伝統音楽として認識されているが、レコードにみられる伝統音楽の変容の魅力は、その時代に人気を博したジャンルの音楽を記録し、その演奏スタイルを残してくれることにある。レコード会社は売れ行きを重視するため、吹込者として招かれた歌手や俳優には、その時代によく知られたトップスターが多くみられる。それらの俳優の流派や独特の歌唱法がレコードに反映されているため、その時代における各音楽ジャンルのスタイルを把握することが可能となった。また、演奏のスタイルは、固定したのもあれば、変容したものもある。たとえば、現在はスタイルや演奏法が定着し、伝統音楽として認識されているが、レコードが誕生した1910年代には、いまだ発展途上であった音楽ジャンルも存在する。したがって、当時の音楽表現とテキストを、レコードを通して再考することは、現在のスタイルに至る形成過程を理解する上で有効であると考えられる。また、それらの演奏スタイルがアマチュアの模倣対象になるなどの事象から、レコードの有用性を確認することができる。さらに高度な芸を身につけたアマチュアが自ら吹込んだレコードを販売したという事例も存在する。

以上のような伝統音楽とレコードの関連性についての研究は、以下の3名の共同研究員によるものである。長嶺亮子（沖縄芸術大学）は台湾の歌仔戯という新しい音楽ジャンルの形成に、レコードの果たした役割が大きかったことを指摘した。垣内幸夫（京都教育大学）は中国の語り物である評弾と韓国の語り物であるパンソリの古い演奏様式と現在の演奏形態の比較および語り方の変容を、レコードの録音を通して検討した。また、尾高暁子（東京芸術大学）によると、民国期の上海京劇界において玄人はだしの票友（素人役者）のレコードが数多く制作販売され、アマチュア活動を母体とする上海の粵曲や粵樂もレコード化の対象となった。とりわけ粵樂（＝広東音楽、つまり器楽）は、後にラジオの電波によって全国的に



1934年に発売された台湾の歌仔戯「蔡伯階」の歌詞カード（複写）。当時は歌曲戯というジャンルで称された（2014年、劉麟玉撮影）。

普及したと指摘した。

2. 映画とレコード音楽：今日において、映画の主題歌を含むサウンドトラックが単独で発売されることは、至極当然のことと考えられている。しかし、その発想は決して新しいものではなく、1920年代以降にはすでに存在していた。人気のある映画であればあるほど、その主題歌も高く認知され、はやることになる。サウンドトラックから生まれたヒット歌手や、それらの歌の流布の状況、その影響力などは、レコードの売り上げ枚数や新聞記事を通して把握することができる。また、無声映画の時代に映画のストーリーを語った弁士のサウンドトラックの存在も確認できた。

このように考えると、主題歌やバック・グラウンド・ミュージック (BGM) が映画に与える効果や、映画を通してその時代の音楽的背景を探るなど、映画と音楽を巡る研究視点はじつに多様である。以下の3名による研究は、こうした視点に立ったものである。三澤真美恵 (日本大学) は、植民地時代に撮影された映画のコンテキストから読み取れる台湾総督府の思惑や政策宣伝を分析し、また無声映画時代の台湾の弁士の役割についても検討を行った。今田健太郎 (四天王寺大学) は映画の中で音と音楽はどのような役割を果たしているのかを研究し、映画における主人公らの生活音という「物語世界内の音」と、音楽監督が意図的につけたバック・グラウンド・ミュージックである「物語世界外の音」を区別した。そして、日本の映画は「物語世界内の音」を強調するのに対し、アメリカ映画の場合は「物語世界外」から観客に解説しようとするという、両者の音の扱い方の違いを分析した。西村正男 (関西学院大学) は、ともにレフ・トルストイの『復活』に基づいて作られた日本の映画『カチューシャの唄』と中国の映画『復活』についてそれぞれ主題歌に焦点を当てた比較研究を行った。

3. 流行歌：レコード研究において、流行歌は比較的研究が進んでいる分野である。一般的に、流行歌はその時代の世相と音楽スタイルを反映するものであると考えられている。また、流行歌のヒット歌手や作詞・作曲家は、どの時代においても、つねに脚光を浴びる人々である。SPレコード時代における台湾と上海の流行歌についてはすでにいくつかの先行研究が存在する。しかし、当時リリースされた曲数は膨大で、これまでに研究されたものは氷山の一角に過ぎず、この分野における新しい研究対象、研究視点はますますその裾野を広げている。本共同研究における西村正男の研究はその1つと言えよう。梁楽音という神戸華僑の作曲家の作品を収録した1930-1940年代のレコードを発掘し、梁と日本との接点を明らかにしながら、彼の時代と彼に関わった歌手の系譜を整理した。その研究は映画音楽と流行歌の2つの研究領域にまたがるものでもある。

4. ラジオとレコード：ラジオ放送の開始はレコードの需要を増大させたと言えよう。ラジオ放送のプログラムの中には生放送も存在するが、録音した音声やレコード音楽を流す割合はかなり大きい。植民地台湾における1930年代以降のラジオ放送の番組を調べると、その内容は邦楽、クラシック音



神戸華僑の作曲家・梁楽音が作曲した「売糖歌 (鉛売りの歌)」(1943年発売)のレーベル (2015年、提供：西村正男氏)。

楽、童謡など、多岐に渡り、その大半はレコード音楽によるものであると考えられる。しかしその一方で、星名宏修 (一橋大学) は、植民地台湾時代の台湾人や在留日本人が、レコードによる音楽番組だけではなく、ラジオを通して、日本語のラジオドラマや文学作品の朗読を聞いたことを明らかにした。娯楽と動員という2つの役割をもったラジオで、日本語によるラジオドラマの「声」がどのように響いたのかを明らかにすることは、日本統治下の台湾における近代を理解する上で重要である。これは、本研究課題が探求しようとしている

「声の近代化」のもう1つの側面である。

5. 植民地台湾におけるレコードの製造と発売の過程：レコードの製造と発売はレコードを普及させる原点である。日本では欧米や日本のSPレコードの誕生や発売に至る歴史的研究がすでに行われているが、台湾ではこうした研究がまだ乏しい。その理由として、一次資料の欠落が挙げられる。当時の状況を解明することが台湾のレコード史を把握する上で重要な課題であると考えられる。筆者は台湾コロムビアが本社の日本コロムビアに送った注文書を用いて、台湾子会社と日本本社間のやり取りの一部を明らかにした。その資料には、台湾でレコードを毎月発売するために関わった部署、また個々のレコード制作における音声の調整法や、発売にあたっての宣伝方法などの情報が含まれている。

また、特別講師として、朴燦鎬 (レコード研究者)、康尹貞 (ロンドン大学博士課程)、陳培豊 (台湾中央研究院)、貴志俊彦 (京都大学)、岡田孝 (奈良教育大学)、斉藤徹 (日本コロムビア株式会社)、八日市屋典之 (金沢蓄音機館)、張偉品 (上海戯劇学院) の諸氏を招き、研究報告をしてもらった。字数の関係で報告内容を割愛するが、そのほとんどが上記の5つの研究課題に当てはまるものであった。

今後の課題と展望

以上、述べてきたように、本共同研究はこれまで、さまざまな観点からレコード研究を行ってきた。それぞれの研究テーマに含まれる共通の課題は「声の近代化」である。さまざまな音声に近代化をもたらしたのは機器であり、技術である。また、語り手や歌手は、それに応じて音声の表現を変容させた。これまでの研究期間で、台湾、上海、日本におけるレコードの近代化やレコードテキストの変容という膨大な課題をすべて解明できたわけではないが、本研究を1つの契機として、より多くの研究者がこの領域に注目し、研究に取り組んでいただけることを願っている。

りゅうりんぎょく

奈良教育大学教育学部准教授。専門は音楽教育学、民族音楽学。論文に「從選曲通知書看臺灣古倫美亞唱片公司與日本蓄音器商會之間的訊息傳遞——兼談戰爭期的唱片發行 (1930s-1940s)」(和訳：台湾コロムビア販売会社と日本蓄音器商會の選曲通知書にみられる対話——戦争期のレコード発売状況を含めて (1930s-1940s)) (『民俗藝』182: 59-98 2013年) など。